



宇宙の復讐者たち

————Space Revengers————

一章 惑星ダビドゥーン

荒野アリゾナのような星、ガンバー大司教（番犬）がシェパード人（変身動物スウィフト・ワンダー）に証しをしている……

大司教は啓示を受けたようでしばらく経ってから話し始めた……

スウィフト・ワンダーに語ったのは以下の事である。

“スウィフト・ワンダーよ、汝は変身動物の末裔なり……

そがために汝の父は汝をかばって死に、汝の母はそなたの身体に水爆を埋めこんだのじゃ！
さあ！ 曲がった杖を取れ！ くれぐれもスコッチ（スコッチテリア人、スコッチ星系、スコッチ星、ベニター島の本部コンピューターに拠点を構える暗殺武道の長）に水爆を逆用されるなよ……”

ガンバー大司教の前で座り、腕を合わせてしゃがんでたワンダーは立ち上がって言った。

「ぼく、殺るよ。自爆してもスコッチを殺す！！」

一方岩の陰から、革靴の端がのぞいていた。その主はチェックのズボンをはいた狼人ラルフ。

「生かして連れて来いと命令を受けたが……爆弾とはやっかいだぜ！」

彼はスコッチに雇われた賞金稼ぎである。

突如、ラルフは本能的に身を捻ってわきへ跳んだ！

「ワッ！」

ナイフが二本すごいスピードで飛びぬけた！

凄い動物的カンの良さ！

「動くな！！」

仰向けに砂の上に倒れるラルフを狙っている銃口があった。

ラルフは苦しみもたれながら人物の影が誰であるか見極めようとした。

白いキャップに黒いハードなサングラス、両腰のガンベルトにモーゼル銃を二丁つるしている男がいた！

「ハハハ！ 俺はさすらいの海賊パースーマンよ！」

ラルフ「な、なんだ？ キサマは……」

パースーマンはラルフを立たせ手を西洋式に上げさせて、

「あの善悪にうるさい司教に邪魔されないうちに貴様の船に案内しろ！」

とモーゼルを右手で狙って案内させた！

パースーマンはラルフを両腕をがんじがらめに縄で縛って転がしてラルフの両翼にロケットエンジンのついた宇宙艇の中にハッチの階段から入り、

「機械オイルにレア・メタルに食料、ゴムタイヤ、シャフト、ありがとうよ！」

と、転がしたラルフにスパナやら釘やら投げつけた。

二章 賞金稼ぎに過去……

話しは二、三年前に遡る。

ラルフはバズーカーでターゲットを標的にして破壊していた。

ズガッ！！

“ククク……バズーカーの腕で俺にかなうやつなどいないわ！”

「今度はアレを狙おう。」

彼は独りで言った！

あのブロンズ像を！

弾を装填すると、ターゲット・スコープでよく狙いをつけた……ところが！

ズガン！！

さてスローモーションで見てみよう！

確かにブロンズ像は左手刀でよけたのだ！

バズーカーの弾が外れ、像の後ろに大爆発が起こった！！

「ば、馬鹿な！！」

ボカーンンンン……

ラルフの耳には信じられなくてエコーして爆発音が聴こえていた……

冷静になる、さすが賞金稼ぎのプロ。

「至近距離で外れた最初の目標だ……」

スタスタ近づいて行って手に握ったりモコンのボタンを押す！

「念動装置で船の倉庫の奥に積み込んどこう！」

ブロンズ像が重力を失い、無重力空間を漂うみたいに倉庫に積み込まれた、それから像は今まで眠っていた……

三章 ラルフの宇宙艇の倉庫

パーサーマンは倉庫や廊下の壁のポストを壊して歩いた……まるで鋼鉄の腕を持っているかのよう

ドン、ガラガシャ！

そして「なんだ、ここはろくなものがねえな！」と錆びた鉄骨を数本かき混ぜているところで……

バン！！

ブロンズ像が後ろに立っていた……

「ん？ なんんだ？ この変な像は！」

突然、像に見えたものは擬態化したバツタ男（マスク）だったのだ。

一瞬でパーサーマンの首が飛び、オイルを噴出して転がり落ちた。

機械人の首の無いパーサーマンは両手を交差して必死に二丁のモーゼルを弾がなくなるまで撃ちつくし、銃を投げ落としてハッチから出て来た。

その頃ラルフは縄抜けの術で見事脱出に、成功していた！

「良かったぜ！ ありゃ、あいつロボットだったのか……拾ったナイフじゃトドメは刺せね

えな。」

ピュー！

と機械人はメチャメチャに走り回っていた。

四章 商船の**ABC**と**XYZ**夫妻

「死ね！ 海賊！」

女性のビーグル人XYZ（吊りスカートを履いてマシンガンと衝撃ビームを切り替えられるライフルを持って）が機械人の右腕と左脚を同時に破壊した。

ビーグル人は永遠に生きていられるエルフのような存在なのだ。

「よくも私の船の積荷を盗んだな！」

XYZは脚で跳んで機械人を踏みつけ、ライフル銃の脇に抱える底のほうで何度も何度も機械人を突いた！

ラルフはあまりの展開に「はは……」と苦しい笑いをした。

バガン！！

XYZは衝撃ビームで機械人を破壊した。

「おい、そのくらいにしとけXYZ。」

夫のABCがのんびり現れた（彼は惑星Zでガンバー大司教とハチャメチャ・ラリーに出たことがある……若き日のガンバー司教は“スカイランナー”の名声を轟かせミサイル多数、精密小銃二丁、反射ミラーレーザーを操る戦闘機でレースに出た……一方、年をとらないABCは小型タンクローリーでレースに出場し崖から落ちた時、タンクを破ってUFOに乗って脱出した。そのまま空中戦で二人は戦う！ UFOは傾きざまミサイルを放つ。小銃で打ち落としミサイルをバラバラに放つスカイランナー。その上小銃の連射つまり早撃ちでUFOを苦しめる！ やけくそになっ

たABCはガトリング砲で狙うが空中を自在に舞うスカイランナー！ ABCはUFOのハッチからアーモンド状のガス爆弾を多数放つ。危ない事に気がついたスカイランナーは“腕がなるぜっ”とスコープをよく見て小銃や反射ミラーレーザーをピアノボタンで操って片っ端から撃ち落す。ABCは面倒に思ってガトリング砲で全て爆発させ爆風に巻き込もうとするが戦闘機は旋回して落ちない。遂にABCのUFOは誘導ミサイルを放つ！ かりうじて逃れたスカイランナーは積乱雲の中で勝負をつけようとするが……スカイランナーのミサイルがUFOのABCのよけたソファで跳ね返って戦闘機に当たってしまう。墜ちていく戦闘機を狙うABC。しかし爆発したと思ったのは切り離れた燃料タンクだった……最後スカイランナーは突如現れUFOを撃ち落すことになる。）

「盗まれた物が機械オイル類に限られてただろ……どの船も大変なんだ、わかってやれ！」

可愛い眼をしたABCは食事の箸を右手に持っていた。

XYZ「わかったわ、でもABC、食卓での指揮練習はやめてね！」

ABCはオーケストラの指揮者なのだ！

一方、ラルフはなにが起こったのか考えあぐねていた。

「ヤツを殺ってしまったのはこの像のせいかも。幸運の像として惑星長に届けるか??？」

五章 ワンダー殺される？

“トルネコ”のような完璧商人にお金をつくるため総て必要な物以外手放したワンダー。

「ついに曲がった杖まで売っちゃった。先が思いやられる、しかしスコッチ星に行くのに手段は選ばないぞ！」

遠くに輝く鈍いUFOのような金属でできている鈍く輝く塔が見えてきた……かなりの高さだ。

「手がかりはあれだ！」

三ツカギのワイヤーを円を描いて振り回すワンダー。

「届くかな？」

ヒュッ！！

カシッ！

“よし！ うまくひっかかってくれた！ 登るぞ！”

ところが両手でワイヤーをつかみ、グッと身体を持ち上げたとたん！

グググググーッ！

と身体が持ち上げられて塔の入り口に

スッポン！

と入って

黒い皮でできた大きな風船型クッションにポーン！

と投げだされたのであった！

塔の最上部のUFOの中で遠くに座布団に座った人影が見える……

ワンダーはボンヤリ立ち上がって床にポンポン跳ねて降り立った。

そうして“なんだ？ この不可能みたいなちからは？”

と考えていた、右腕の袖には先端にロケット弾のついた銃を隠しながら……

ワンダーはやけになって聞いた！

「光速の船を持つのはあなたでしょうか？」

人影は「私にビジネスの用？ それとも何か？」と聞いてきた。

たばこの灰を灰皿に落としている人物（何者）。

「ただ、並の人間には乗れず！」

ビュッ！！

と瞬間移動したのはキツネ人（フォッグ・フォックス）であった。

さらに近くにテレポート・テーションする！

「私のような霊体だけが！」

顔が巨大にワンダーの目の前に現れた。

「光速の船に乗って移動できる！ どこか他の船に乗りなさい！」

良心的だがワンダーもひけなかった……

「くくく」

ワンダーはあまりの事に転んだ！

「だがこちとらどうしても乗りたくてね！ ロケット弾さ！」

ワンダーはロケット弾を構えた！

「要するに君の欲しいのは死だ！」

フォックスは光弾を両手をかかげ、巨大な光りエネルギーをつくりだしていた！

ワンダーは撃ったがフォックスの身体に透明になって吸い込まれてしまった！

光りの矢が放たれた！

ドウッ！！

ワンダーはスライム状のヘドロになって床に沈んだ……

“馬鹿な男よ。”

六章 税の払えない首領（スコッチ）

「どうした。情報の遅れか？」

宇宙一偉い惑星長は黄金の着物、マスク、マントを着てスコッチを自分の星に呼んでいた。

「光速の船を持つフォッグ・フォックスに情報の遅れをとりましてごさいます。」

スコッチは騎士のように身をかがめ答えた。

「ラルフから幸運の像（マスク）が送られてきたな。」

スタスタとブロンズ像に近づく惑星長。

突然！ 倒れざまにマスクが惑星長の鳩尾を打ち抜いた。

ギャバツ！！

マスクは静かなる暗殺者なのだ。

マスクは槍の達人でABCが牧師だったころ小剣を使う革鎧の盗賊をやってたスウィフト・ワンダーとデリンジャー（魔法使い）、ウォル・トロット（スーパー・キャットという名前でグラサンかけてZ星のレースにパトカーで出場したこともある）という猫人の槍と豎琴の吟遊詩人に連れられて名前の発音できない仙人（捕まったふりをしてオーブ“宝玉”に全人類の魂を吸収し、支配しようとしていた）を助けに行くというアドベンチャーを惑星Gでやったことがある。

この話の後宇宙刑事をワンダーはやることになるのだが、その時スーパーキャットは事件の噂を喫茶店で彼に流している。

「ヤロー！！」スコッチは完全に切れて重いバツタ男、マスクにつかみかかった！

この以前スーパーキャットとABCとスコッチは宇宙船で怪獣ハンターをやっていた頃がある。怪獣を操るギャーゴ星人の魔手からD星を救ったのだ。

マスクのアッパーが入ったが、ビックバン・オーラでかわされてしまった！

強烈な気のカだ！

そしてスコッチは流星オーラでマスクを真っ二つに割った！！

「暗殺者になめられてる。注意せねば……そしてもう一人殺す（謎の台詞）。」

七章 変身動物の能力

ウジュー！ ウジュー！

少しずつワンダーはカタチを取り戻した……そして岩にもたれかかりため息をついた。

「司教に報告しよう！ あれっ！」

司教の土の家が爆発した！

「司教さま～！」

ワンダーが走ると

ドギューン！！ ボカーン！

バズーカー・ジョー（手、足、顔から爆弾を撃てる）の攻撃を遠方より受けた！

「新手の敵か！」

しかし輝く光り情報 frisbee がバズーカー・ジョーを破壊した。

「オーイ！」

エネルギー体が現れ、話した。

「俺の名前はライデン。司教のつくったエネルギーだから長くはもたない。消える前に情報フリスビーを渡しとく！」

「ありがとう。」

情報フリスビーはボヤー！　　と膨大な情報をワンダーにもたらした。

“私はガンバー。私のちからをあなたにあげよう。ラルフとフォッグ・フォックスの船は避けドラマンの船に乗りなさい……”

そしてエネルギーは最後にチョーズン（変化の杖）に変わった。

いろいろな武器になる杖だ！

八章 西部酒場での闘い

ここは古い西部劇のテキサスの酒場のような店だ！

開き扉を放り入るとナンバー・ホームズがバセドー氏病のようなおかっぱの頭でパイプをポッポッ！　とワッカにしてくだしていた……どうやらこれが店長らしい！？

「昔俺はドラマンの助手だった。」

「船の場所は……」

突然立ちあがったシャドウが！

ガタッ！！

それが銃を持って用意の早いプロの気だった事を……ワンダーは直感で感じた！

「宝の杖を置いていきな！ 飲みにもしないヤツが来るんじゃないよ！」

ワンダーの杖は

“Change!! (変化！)”

ダンッ！！

「イテッ！」

たちまち早撃ちで右手の平を撃ち抜かれ……銃に変わった杖がはじき落とされてすっとんでいった！

ワンダーはその髭と荒くれの髪のかっこうなんかより腕がはっきり確かな男が

“片手。しかも左手じゃ撃てまい”

と感じていると知りながら三回転がって銃のそばに拾いにいきながら希望を捨てなかった！

しかし銃をとりあげたと思った途端三回連続で銃は弾き飛ばされた！

男の銃の腕はやはり確かなものだった……

正面から構えられ

“正体がバレル。”

と感じた瞬間男の動作がピタリととまった。

バタッ！

後ろに黒いキャップと眼帯を左眼にした丸頭の髪がなくて頭に長い縫った痕がある男が立っていた。

百八十センチある。

銃はなんだか見たこともないものだ。

「俺がドラマンだ。麻痺銃さ！」

ワンダーはフウとため息をついた。

そして隣りにガサガサ頭の不精髭だらけの太った男が現れドラマンはその男の肩に手まわし……

「おっと。これは俺の親友のホオムズだ。宜しく！！」

ホオムズおだやかに「はじめまして」

ワンダーは杖を拾いながら言った。

「私はスウィフト・ワンダー。父と母の仇であるスコッチを討ちたいのです！」

ドラマン。ワンダーを覗くように下をむいて

「スコッチは惑星連盟を脅かす盗賊ギルドの暗殺武道の長で誰も彼の権力には逆らえないといわれている……しかし男というものならば必ず彼と決着をつけねばならん！」

「俺の船はちょっと遠いがその怪我で歩けるか……？」

しかし案外近かった。ドラマンとホオムズは本当は優しいのだ。

「俺の船を紹介しよう。エクストラオーディナリー号だ。“非凡”という意味さ！」

中は小さめの船だが四次元に入ったように広く感じられた……設計者はこの二人の協力だったという。

「コクピット、レーダーとホログラフィーも見れる広間、エネルギータンク、ブラックホール発見機……」

順番に見ていった。

素晴らしい！

「全体図だ。」

半球形のヘッドの衝角（ラム、衝突後空いた穴からハンゴを伸ばして敵機に侵入できるようになっている）、本体上部の二門のパルス・レーザー砲、両方に丸く出っ張っているところに隠された光線魚雷（オプティカル・ミサイル）、火を噴くロケットエンジンと誘導ミサイルが数発隠された後部の開閉式格納庫、そこにひとつひとつ六つ取り付けられたアンテナ型の機雷（追って来たやつにカマせる）。

まさに非凡だ！

ワンダーはこの小型船の能力を見て思った……

九章　さらば惑星ダビドゥーン

ワンダーは変化の杖をかざした。

すでにメカに強いドラマンが調べていた。

「第一の力、太陽剣（サン・ソード）！」

ブーン！！

輝く、一メートル五十センチの片手半ブロードソード（広刃の剣）の光り！

レーザーターゲットが空中を浮遊して撃ってくる！

ドラマン「100℃の熱だ！　頑張れ！」

よけるワンダー！

ブラインド・シールド（盲目障壁）がワンダーのヘルメットにかかる！

「み、見えない……」

撃たれた……ギャッ！

十章 海の惑星ノーマルディ

島に着陸すると食料や水、物資を供給し、祈とう師にチェックを入れてもらうどころかエスパーの七郎まで同行した。

ドラマンは宇宙で顔がきくのである。

優しいし、弱い者、貧しい者の味方だからだ。

十一章 燃料切れの戦い

ドラマンは宇宙の海賊（賞金がかかっている）である。

惑星メローナで燃料補給を考えてたドラマンであったが、ホオムズの推理どおり、そこには宇宙警察の十機のパトシップと、巨大な母船が待ち受けていた！！

「とりかじいっばーい！！」

おもいきり急転換を全速前進ですると、オプティカル・ミサイルで三機撃墜した。

不意打ちだ！

「そして逃げるふり！」

ビーム弾が雨あられと飛ぶ中、後部格納庫より誘導ミサイルだ！

「お助けー！」

お互いにぶつかって二機破壊！

前後から、はさみ撃ちにきた二機の帕特シップは格納庫を開きロケットエンジンでふきとばしながら、パルス・レーザー砲で線をずらして二機とも撃墜！

追ってくる三機はアンテナ型の機雷を六つ分離し、

「ああ〜」

狂ったように爆発！

「残るは母船だけだ！！ 眼をつぶしてやる！！」

両側面の二つのパラポラアンテナをパルス・レーザー砲で沈黙させ、正面から衝角（ラム）で突っ込んだ！！

壁にめりこんでできた穴の中に梯子を伸ばして巨大な母船にドラマン、ワンダー、ホオムズ、七郎は乗り込んだ！

「ポリスだ！」

銃を持って四、五人通路を来るが、七郎が白い知性の光線を手から出し大爆発させた！

「テイク・ザット・ユー・フィンド！！」

バババーン！！

天井から開き戸が開き、三人のポリスが跳び下りてきた！

ドラマンがマシンガンにふりまわされながら下から上に振るようにバタバタ撃ち殺した！！

突然、壁の穴のトラップから矢が十本

ポン！ ポン！ ポン！ ポン！ ポン！

ホオムズが紫になって倒れた！！

「太陽剣！！」

ワンダーが壁を破壊する！

ドラマン、ホオムズを支えるが安らかにホオムズはくずおれた……

「ホオムズ……」

涙をふりはらいながらドラマンは叫ぶ！！

「コアを破壊して母船を大爆発させろ！」

七郎が気のエネルギー弾を放ち、トンネルができる。

「コアにつながってるで。」

十二章 補給完了

歯をくいしばるドラマン。

母船が大爆発し、ドラマンの船はメローナに到着した。

「成功！」

七郎がレーダーを調べる。

スコッチ星へ向かうためプロミネンス系の二重太陽の間をわたるか、盗賊軍団の宇宙船団をやぶらなければいけないことにドラマンが気づく！

ドラマン「ぼんやり宇宙を見つめて考えるかな」

ワイングラスを呑みほし

「プロミネンスの高熱の炎をくぐりぬける！」

ワンダー、レバーを倒して「熔けて死ぬぞ！」

しかし、壮大な炎の二重太陽の中、船は光りの聖域に護られていた……

七郎が倒れて「M o o o n」

ワンダー「七郎はフォースを使い切った、死んだよ。」

ドラマン「すまない……きっとスコッチは倒すぞ！」

ウー！ ウー！ ウー！

「なんだ！ 侵入者か？」

ワンダー「おかしいな、ノーマルディで祈とう師にチェックを入れてもらったのになあ？」

十三章 炎のあとのエネルギー

走って小男に銃を向けるドラマン！

「どこから侵入した！」

「落ち着け」手をあげる禿げた男にはどこか七郎のおもかけがあった。

「七郎兄が死んでたまらなくなってきたんだ！」

「テレポーテーションか……」

ハッ！

ドラマンは息をのんだ！

眼帯に取り付けられたセンサーが微妙にデータを分析してチラチラ輝きだしたのだ！

七郎の弟が気絶する横で幻獣を連れてきてしまったことにまだ、このベガーという男は気づいていないのだ！

ジャジャジャジャジャジャジャ……

放射状に伸びる尾を持った幻獣“千尾のキツネ”だ！

ドラマンは巨大化する怪物に飲み込まれそうになった！

ワンダーが跳ねて銃を撃ち、ドラマンが長剣で豪快に斬った！！

「幻獣は剣で斬るに限る。」

ドラマンの背中にフォッグ・フォックスの影が現れた！

「よくぞ、わがライバル千尾のキツネを倒してくれた。礼を言うぞ！」

「俺の靈魂発見機（眼帯）が反応してる。やつはまさしく霊！」

ふりむきざまにドラマンはカッターつばの帽子を投げた。

トイレに刺さり、フォックスは消えていた。

ドアが開きベガーが大便をしている「エッチ！」

「俺は靈魂なんか信じないぞ！」

ワンダー「俺はやつにこんな風にされた。」

首から下を液状化するワンダー。

「ゲゲッ！ なんだそりゃ！」

「まあ、水爆もこんなカタチで入っているんすヨ！」

ドラマン「お前は生きてんのか死んでんのか？」

その時！

あと三匹丸まって千尾のキツネが転がり込んできた。

「一匹じゃなかった！ 船を捨てるしかない！」

ドラマン「自爆レバー！」

ガタン！

ドラマン、ワンダー、ベガーは通路を走り出す！

船の先端部分がスライドすると、脱出艇が発射された！

すぐに船は爆発。

キツネは固まってくっついて一つになって膨らみだした。

どんどん空間を占めていく！

「なんてお化けだ！」

ベガーがドラマンとワンダーに剣を背中合わせに寝せて

「横になって……お前らのこころを莫大なパワーに変えてやる！」

巨大なキツネは驚いた！

合体した二人がロケットから膨らむように出てきて首を剣で斬ったからだ！

ゴウーン！！

「もういいだろ！」

スーッ

と二人のこころの霊体エネルギーはロケットに引っ込んだ。

十四章 宇宙ステーション

宇宙ステーションが現れ、そのハッチにラルフの船が発着していた。

「チャンスだ。変装して入ろう、ベガー、お前臭いから来るな」

バーの前でラルフが呑んでいた。

すぐにドラマンの靈魂発見機（眼帯）が反応しだした。

「あいつ、生命力が切れかけてるぜ」

ワンダー「それなら宇宙船ももらってやろう」

ベガーがハッチへ走り、たちまち三人は宇宙船を盗んだ。

ラルフ「泥棒っ！」

宇宙船にはシルクハットの紳士が縄で縛られて捕まっていた。

「マーチンというんだって」

となりに太めの船が現れた。

「ABC夫妻もスコッチ星に行くのかあ」

ABC「こちとら商船でいっ！」

十五章 スコッチ星

たどり着いたスコッチ星。

「ベニター島だ」

着陸。

ABC達と交渉を始める。

「スコッチを殺し、税は納めなくていい？」

XYZ「おもしろいわね。私たちのローンも解決だわ」

ワンダー「そう、ちょっと協力してくれればいいんだよ♪」

商品のバンに乗って本部に行く。

レーザーが空を裂いてドームに何本も突き刺さってる。

到着すると、マーチン、ベガー、ワンダーは商品のいくつものBOXの塊にまぎれて流れ出した。

ドラマンが操作パネルに残る。

「！」

「フォッグ・フォックスの本体はこのプログラムのウィルスにまぎれていた……今俺がそれをつきとめたぞ！あっ」

———コノオレイハ、コノホシデカエス———

「しまった！追わなくては！」

十六章 スコッチ

スコッチ「俺のESP（第七感）が敵を察知した！」

ABC「マジー」

XYZ「ひやひや」

スコッチがBOXのほうに手を伸ばした。

ABC「やめろ！」

おもむろにスコッチ、ABCの手を導くやいなや、肘うらに当身を！

「小惑星落とし！」

ABCの手がちぎれて！ 落ちる。

XYZが銃をぶっぱなした。「キャー！よくも！ABCを」

スコッチが死中の活！弾丸の射撃を見抜き磁力拳！

パァン！

XYZが後ろに倒れる「ごめん……ABC」。

荷物BOXのひとつが割れ、ベガーがABCの手を治療に走る！

マーチンが細身の剣を抜き、ワンダーが突っ込む！

スコッチの気が爆発し、三人をふっとばす。

「超新星誕生！」

「ふふ、水爆ごときこうしてくれるわ、液体水爆浄化！」

ワンダー「のわっ！水爆がなくなったあ」

死ねえーとスコッチがワンダーの眼をつぶそうとすると、マーチンの剣がスコッチの腕に刺さる「魔のフォイル！」。

スコッチ！ 剣を燃やす「バーニング・オーラ！」。

ベガーがスコッチの傷ついた手をとるが、スコッチは当身を入れながら、ベガーの腕を回転するようにくぐり、頭を押しえ込んで「クロソイド・スロー！」

ベガー「うう！ 後を頼む、気を吸い取った！」

さすがはエスパー、投げられながら、スコッチの気を封じたのだ。

十七章 ドラマン追う

ドラマンが追いついた。

フォッグ・フォックスが巨大化して一同の目の前で、光弾を両手をかかげ、巨大な光りエネルギーをつくりだしていた！

スコッチ「やつを倒せるのはオーラのみ！」

スコッチ「くらえ！ 霊破拳！」手を差し上げ、フォッグ・フォックスへ返した。

ところが……し～ん！ 「あり？」

マーチンが指差して「ベガーの気吸収のせいだ！」

「フィニッシュだ。」フォックスが光弾をぶつけようと、ところが、ヒヤリ！ ドラマンが「最後の手段、眼帯投げ！」ブツリ眼帯を右手でちぎるとフォックスへ投げた。

フォックスは「ぎえああああああ」と断末魔の叫びで蒸気と消えた。

スコッチは構えるドラマンがかつての自分の一番弟子だった証拠の潰れたほうの目を見た。

かつてスコッチが流星オーラでえぐったものだった。彼が五人の部下とドラマンを襲い、後ろからえぐり、トラックの荷台にとび乗って逃げられたのだ。

ドラマン「今、ワンダーの復讐とともにお前に借りを返す」

スコッチ「フフフ、ABCは片手を失いワンダーは水爆を失った。お前も片目、勝てるかな？」

ドラマン「お前も気を失ったよな」

スコッチが仕掛けた。「お前のくせは知っているぞ」チョコキを目つぶしだ！

ドラマン、チョップで受けるが、掌打を反対の手でみぞおちに喰らい、後ろにふっとんで回転受け身。

スコッチ「目を狙うとお前は無防備になるんだ！」しかしドラマン「こっちは見えるほうの目だ」スコッチの目つぶしをはじいて、その手を反り返しに極めた。

「ウラ！切れるぞ！」

スコッチ「しまった……しかし、間接はずし！」ドラマン「なに？」

ドズ！ スコッチの片足がドラマンの脇腹に入り、ドラマンの手を小手ひねりに極めてやばい！

ミシミシ言う「いててて！」

「喰らえスコッチ！」ワンダーの光の弓。

「ち」矢を両手でつかむ。悔しくもドラマンの手は放したスコッチ。

「これでも喰らえ！」矢をドラマンの目に……しかし、「アツとと」

帽子を犠牲に肘がスコッチの顔面に入る。そのまま矢を持ったスコッチの手を両手で制して上に反してドラマンの体が入り……

次の時にはスコッチは手と肘を手刀で制され寝そべっていた。

「ハイ」

ワンダー矢を回収しながら「ドラマンの勝ちかな？」

スコッチ「お前などに降参するか。間接はずし！」

肘が持ち上がってドラマンの顔を強打！

ギー！片足を固めようと必死になる血をはくドラマン。

「間接はずし！」

またしても蹴り飛ばされ血をふくドラマン。

十八章 変化の杖

ドラマンにワンダーが掛け声とともに杖を投げる。

パシ。ドラマン「変化の杖よ！俺の入れ歯になれ！」

鋭い入れ歯と化け「ウガーッ！」

「なんじゃありゃ？」スコッチXYZの銃をつかむと乱射。

「目には目を、歯には銃を」

ワンダーが液体化して、スコッチをこけさせる。「あっ」

ドラマンかみつきに行くが、スコッチ「真剣入れ歯取り！」

「イテッ」ついでに首の頸動脈をスコッチが三本指で押す。

激痛「エーン」泣く。

しかし、その手の合谷のツボを押さえ、ドラマンパッ！と立ち上がり

中指を立てた中高拳でスコッチの目を上から強打！

十九章 戦いの果て

ふらつきピヨピヨスコッチを帽子を拾い、ドラマン「さあ立て！」

スコッチの膝蓋腱を膝上から蹴ると、ドラマンの片手にたたらを踏んでスコッチがしがみついた。

その側面に並ぶように入り身し、「爆裂呼吸投げ」。

スコッチは我に返ると一回転して回転受け身、しかし、そこへドラマンのカカト落とし。

頭に喰らいながら今度はドラマン、下から顎を蹴り上げる。

その次は帽子のカッターでスコッチの目と鼻の間を切りつける。

そして、立ち上がろうとするところ、逆手で手首をメキッと痛めつけ倒れこんだところを首を脇で抱え込んでへしおった。

ドラマン帽子をかぶりなおし「終わったな」

ワンダー「ABCもXYZもマーチンも無事だ。でもベガーが」

ベガーがニヤッとワンダーの手で笑う「やったね！」

ABCもXYZは結婚し、マーチンは母星へ帰り、ワンダーとベガーは曲芸人になり、ドラマンは探検家、ラルフは野垂れ死にしたという。

F I N